JSABS 日本ビジネス実務学会
Japan Society of Applied Business Studies
http://www.b-jitsumu.com/index.html

第 44 回
関東・東北ブロック研究会会報

平成 29 年 2 月 18 日（土）、福島学院大学駅前キャンパスにおいて、第 44 回関東・東北ブロック研究会が開催された。今回は福島学院大学のご協力により、ブロック研究会が初めて東北の地での開催となった。地元の方も多くご参加いただき出席者は 55 名となり、地元メディア 2 社の取材もあった。パフォーマンス学界の泰斗である佐藤綾子先生の基調講演をはじめ研究発表、バズセッションなど活発な意見交換が行われ、充実したブロック研究会の一日であった。

総会あいさつ

学び続けることへの挑戦

関東・東北ブロック研究会リーダー
髙橋 眞知子（名古屋経営短期大学）

（研究会終了時の挨拶に、2016 年の振り返りを合わせて、挨拶とさせていただきます）

ブロック会員の皆さんには、いつも研究会活動にご理解・ご協力をいただき感謝申し上げます。振り返りますと 2016 年度は、「挑戦」の年ではなかったかと思います。

9 月に初めての公開講座「論文の書き方」を中村健壽先生に講師をお引き受けいただき、大妻女子大学のご協力を得て、全国から非会員を合わせて 43 名の方が参加され、第 2 弾・3 弾への強いご要望もいただいております。

また、第 44 回ブロック研究会は、初めての東北地区開催を福島学院大学のご協力を得て、パフォーマンス学の第一人者でいらっしゃる佐藤綾子先生を基調講演者としてお迎えして開催することができました。さらに、基調講演を公開講座として広く一般に開かれた形で行いましたので、遠方にもかかわらず 55 名（非会員 20）という近年では最多の参加者を集めて、充実したプログラムを展開することができました。これもブロックの皆さんと運営委員が心を一つにして実現できた研究会であったと感謝いたしております。

これからも、皆さんの研究活動の支援と会員相互の交流を図りながら、学び続けるブロック研究会を目指して参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

基調講演

「リーダーシップ論
～パフォーマンス心理学の視点から～」
日本大学芸術学部　教授　佐藤綾子先生

2017 年 1 月 20 日のトランプ大統領の就任演説では、OK サインを 112 回も示し、歴代大統領から代々受け継がれた聖書に加えてトランプ家の聖書も重ねて宣誓していた。これは自信と正統性を示すもので、口で言わなくてもリーダーシップを体現していた。リーダーの演説や話は「Story & Show」であり、ストーリーを「見える化」することが重要である。

1979 年にニューヨーク

大学でパフォーマンス学を学んで以来、パフォーマンス心理学として発展させてきたが、現在の活動領域は、ビジネス、教育、医学、政治の４つである。パフォーマンス学の普及によって、みんなの幸せに貢献していくことを身上としている。

ビジネス実務リーダーの目指すべき方向性は、時代の変化を敏感かつ正確に捉えた上で自身のビジョンをどうストーリー化し見せていくかである。キーワードは「不易流行」で、「不易」は普遍的なもの、「流行」は変わるものを示している。例えば京都の龍安寺の石庭は変わらないものの「覚悟」を示している。一方、現代社会は、AI（人工頭脳）、IT 時代、グローバル化、格差社会、ストレス社会など刻々と変化している。

個人、特に若者の仕事と組織観は時代と共に変遷している。1950 年代には同じ型の人間を大量生産していたが、1970 年代には新入社員、係長で結婚、課長で子育て、部長で空の巣症候群となり退職するという予測可能な未来が提示されていた。そして今、21 世紀は環境からの様々な取り込みで自己が形成され変化する予測不能の時代になった。

組織経営も、定量的分析中心の大テーラー主義、人間関係を重視するメイヨーのケイパビリティ派を経て、ドラッカーが数字・組織と心・感性をミックスしたマネジメントの有用性を訴えた。箱根駅伝 3 連覇の青山学院大学の原晋監督は「つらいときほど笑う」と言い、日産・ルノー・三菱自動車のカルロス・ゴーン CEO は「社員は自分で自分に火をつける」と言い、ラグビー日本代表のエディー・ジョーンズ元監督は「楽しさと規律は矛盾しない」と言う。3 人の共通点は「サーバント・リーダーシップ」である。

特に教育リーダーには、情緒的幸福（気分の幸福）と認知的幸福（人生の幸福）の両立が求められる。「自分」と「生徒」と「社会」の幸福が重なり合うところに貢献していくのが務めである。そして、教師にも生徒にも必要なのが「やり抜く力＝GRIT」である。生徒の「自己発見」を「自己表現」に昇華させて欲しい。

「Story & Show」で指導していくには、信念を貫き、時に雑音を捨て切ることも必要である。どう見せていくかも重要であり、自分も見せ場では白いスーツを着続けている。

助成研究発表

テーマ：情報機器を活用したアクティブラーニング

岡田小夜子（大妻女子大学短期大学部）
池頭純子（大妻女子大学短期大学部）

本研究は情報機器を用いてアクティブラーニングを実施し、学生の認知プロセスの外化をおこすこと目的としている。すなわち学生が自ら問題を発見し、解決のために能動的に取り組む意識の醸成である。

アクティブラーニングの問題点の一つは主体的に学習する学生とそうでない学生の学びの質の二極化が現れ、フリーライダーが出現したり、グループワークが非活性化したりする点である。本研究では主体的に学習しない学生を対象に、情報機器を用いることによってより能動的に学習に取り組めるように変革することを企図している。

国語・英語・就活対策の授業で電子黒板を活用した。電子黒板のメリットはシンキングツールに適している点、発表などのパフォーマンスをするときにより効果的に伝えられる点である。国語・英語では原稿を学生各人が作成し、電子黒板でそれを 4 分割にして映し出し、発表しあい討議する

ようにした。

学生が「しなければならないがやりたくない」ことについて、情報機器を用いることによって、学生自身が欠けている点や必要な知識に気づき、自らその改善に向けて動く姿勢が見られた。

個人研究発表

テーマ：学生アンケートからみるジェンダー観とキャリア教育

坂本祐子（群馬パース大学他非常勤講師）

医療系の大学生と社会科学系の大学生で実施したアンケート調査において、学生は、固定的性別役割分業に反対する意識を持っている一方で、「子育ては男性より女性向きである」「子どもが 3 歳までは母親が育てた方が良い」、「母性本能があるから育児はうまくできる」「3 歳以下の子どもを母親の仕事のために保育園に入れるのはかわいそう」といった考えが医療系大学生（女性）に強くみられることが分かった。

そのような意識や自身の母親の働き方と学生自身のキャリア意識との間に有意な差があることが明らかになった。幼い頃、母親が働いていると、「子どもは 3 歳までは母親が育児に専念すべき」、「保育園はかわいそう」という意識になり、キャリアを継続しないと考えているのである。

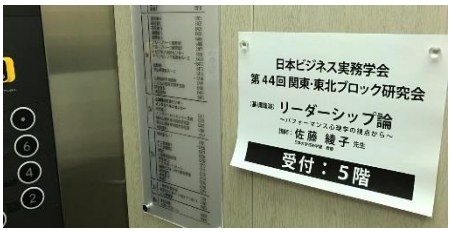
「子どもにとって保育園で育つことは発達にとってプラスの影響がある」といった子どもの発達に関する正確な情報や、様々な働き方に関するロールモデルを学生に提示する等のキャリア教育が有効だと指摘した。

実践事例報告 1

テーマ：女子大学における人材育成の取組み～人材育成のフレームワーク～

安齋　徹（群馬県立女子大学）

実務経験を経た大学教員として、コミュニケーション教育、リーダーシップ教育、ビジネス教育、社会デザイン教育（クリエイティビティ教育）、キャリア教育を通じて女子大学で人材育成に取り組み、確かな手応えを感じているが、人材育成のフレームワークを提示する。能力・スキル、視野・ビジョン、経験・タスクに分類し、第 1 に、コミュニケーション・リーダーシップ・クリエイティビティという能力・スキルを習得し、第 2 に、社会・ビジネス・自分に関する視野・ビジョンを身につけ、第 3 に、協働経験・企画経験、失敗経験という経験・タスクが求められる。飛行機に例えるならば、「エンジン」としての知識だけでは、飛び立つことができず、「操縦桿」を操る視野・ビジョンを身につけ行き先を見定め、「翼」としてのスキル・能力でより高く速く遠くに飛べ、「推進力」となる経験・タスクを重ねることで実際に前に進むことが可能となる。



実践事例報告 2

テーマ：地域連携 PBL の設計と運営

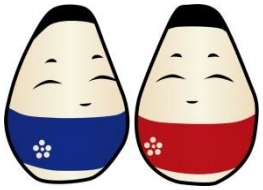
山口憲二・金 世煥(キム セファン)
（いわき明星大学教養学部）

本学教養学部 2 年次後期必修科目「CD２」（受講生 120 名）、後続の選択科目「CD 特講 A」(同 38 名）を PBL として実施した（CD＝キャリアデザイン）。その設計と運営のプロセスを、主に教員及び学生の意識の変化に言及しながら報告した。

担当教員はビジネス・キャリア教育系分野で新たに採用された 6 名であるが、学部・学科開設準備から関わった客員教員 2 名が設計・準備のサポートに加わった。本事例の特徴の 1 つは PBL の組織的実施である。

「CD2」では 6 名の教員がそれぞれ 1 テーマ・平均 20 名の学生を担当したが、各教員はさらにそれを 2 、 3 チームに分けてマネジメントした。発表会は NPO とのコラボで実施、参加した一般市民とのブレストも行った。後続の「CD 特講 A」では 38 名の学生が同じテーマで成果をさらに改善、精緻化した。

アンケート結果から、学生の PBL への興味・関心は高くなったといえるが、個別には馴染めない学生もいる。



バズセッション

テーマ：「自己表現」「キャリア教育」「ダイバシティ」「インターンシップ」「地域連携」「アクティブラーニング」

飯塚順一先生をファシリテーターとして、今回から澤田裕美先生がサブに入られ、テーマごとにグループに分かれ、活発なバズセッションが行われました。

参加者は、少人数のグループのなかで学校での取り組みの成功例や課題などを率直に語り合い、情報共有をはかりながら、有意義な意見交換の時間を過ごしました。

研究会を終えて

第 44 回関東・東北ブロック研究実行委員長
小松由美(福島学院短期大学部)

第 44 回研究会は、2017 年 2 月 18 日（土）に福島学院大学を会場に開催されました。東京以外で初めての開催であり、時期的に大雪や参加者数等が懸念されましたが、当日は天候にも恵まれ、55 名の方がご参加くださいました。

基調講演には、日本のパフォーマンス学の第一人者である日本大学芸術学部教授の佐藤綾子先生をお招きし、「リーダーシップ論　～パフォーマンス心理学の視点から～」と題してご講演いただきました。「不易流行」をキーワードに、時代の変化に伴うリーダーの在り方などについて語られ、今後のリーダーが目指すべき方向性につい

て理解を深めることができました。

また、研究発表 2 件、実践事例報告 2 件がなされました。

恒例のバズセッションは、参加者の情報交換と相互啓発となる、大変好評を得ている企画です。タイムリーなテーマに基づいて大いに話は盛り上がり、今後の指導に活かせるお土産を持ち帰ることができたのではないでしょうか。

アンケートでは、東京以外での開催に前向きなご意見をいただきました。ブロックとして今後の参考とさせていただきます。

最後になりましたが、ご参加いただいた皆さんに、心から感謝申し上げます。

会場になりました福島学院大学駅前キャンパス

会場で販売された佐藤綾子先生の書籍の一部

お知らせ

☆2017年度も前年度に行いました「論文の書き方」講座のような会員の皆さまにとって有意義な企画を検討しております。具体的な内容は追ってブロックメールにてお知らせいたします。

編集後記

☆東北での初めてのブロック研究会、運営委員の一人としてぜひ成功してほしいと思っておりましたが、予想以上の盛況でとてもうれしく思いました。また、このブロック研究会の実現はブロックリーダーの高橋眞知子先生の熱い思いと、それを受けて細やかにご準備いただいた実行委員長の小松由美先生に、運営委員が一致団結して取り組んで実現した開催でした。普段、参加が難しい東北の会員の皆さんにも多数ご参加いただけました。また、数年後にこのような機会が持てたらと願った研究会でした。（畠田幸恵）

☆充実した研究会の後の懇親会は、まさに「懇親を深める」楽しい一時でした。とりわけ、郷土色豊かな美味・美酒を木村信綱先生の肝いりで揃えていただき、福島ならではの「福が満開　福のしま」を堪能させていただきました。ありがとうございました！（宮田 篤）